

日韓国民交流(九)

光州での日韓交流講演会

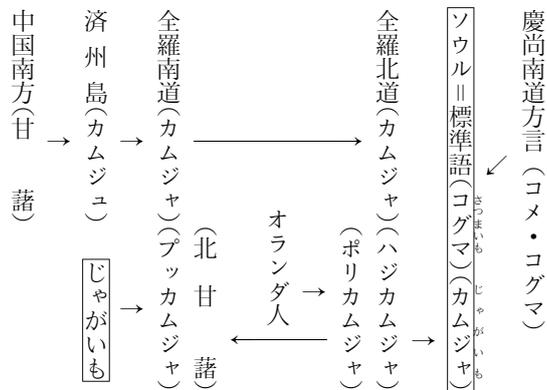
新羅大学院特別教授 藤井茂利

日韓交流講演会の最初の講演者水野俊平先生の話は聴衆に深い感銘を与えて終わった。

次の講演はプログラムによれば私の番になる。題目は「韓国語『カムジャ』の流動」と事務担当者に伝えておいた。

「コグマ」「カムジャ」の問題についてはこれまで何度か講演している。ソウルの祥明大学の朴那美教授などは「先生のコグマ・カムジャの話は三回聞きました」と語られた。このテーマの講演はソウルだけでなく、釜山でも福岡でもしている。しかし全く同じ内容の話ではなく微妙に話の焦点をずらしている筈である。朴那美教授も「先生のカムジャ・コグマの話は聞くたびに味が違う」と誉めて下さった。

この「コグマ」「カムジャ」の話は本誌(平成13年4月号)でも述べており、その折に次のような図表を示している。その関係図を再度示しながら説明していくことにしたい。講演の時にはこの図のままではないが、これに近い関係図のようなものを示した。



光州で「コグマ」「カムジャ」の語を取り上げた理由はこの地が「カムジャ」の語の意味を類別した地と考えられるからである。
「さつまいも」
対馬方言(コココモ)

慶尚南道方言(コメ・コグマ)

ソウル標準語(コグマ)(カムジャ)

全羅北道(カムジャ)(ハジカムジャ)(ポリカムジャ)

全羅南道(カムジャ)(ブッカムジャ)

済州島(カムジュ)

中国南方(甘 薯)

「カムジャ」は韓国語の標準語では「じゃがいも」を意味している。しかし「じゃがいも」を意味している。しかし

全羅南道では「カムジャ」は「さつまいも」を意味している。これは何故であるのか、この説明が必要である。

「さつまいも」はもともと「甘薯」というのが中国語の言い方である。「地瓜」(ディクワ)という言い方もあるが、これは主に山東省あたりで使われている方言である。現在の中国語では「白薯」(「紅薯」とも言っている)が、「カムジャ」語の流動を考える上で極めて大きなヒントになっている。

「甘薯」という語が「カムジャ」のように発音されている地方は中国には見当たらないが、この発音の原形になった「カムジョイ」と発音されていた地方が廈門より100km南下した東山島付近に、少なくとも19世紀の頃には存在していた。それは島津薩摩藩に残っている中国語単語集『南山俗考』を見れば判る。

この本は中国南方と密貿易をするために作られたと考えられる版本であるが、その中に「薯」と同音の漢字「庶」に「ジュイ」とカタカナが付されている。これを基にすると「甘薯」は「カムジュイ」の発音であった。

この音が済州島に伝わった時「カムジュ」或いは「カムジャ」になった。現在も済州島にはこれに近い発音が見られている。済州島から半島西南端にこの

音が伝わった時、更に訛って「カムジャ」になった。

この発音、或いはこれに近い発音をする地方は全羅南道ほぼ全域、全羅北道の全州、淳昌、井邑、金提地方、忠清南道、公州、江景、舒川の地方である。

実は釜山でもこの発音をしたとされているが現在ではその言い方は見られない。かつては全羅南道の或る地方から船でこの「甘薯」が伝わった時に「カムジャ」の言い方も伝わっていたものと推定されている。

「甘薯」を「カムジャ」と発音する地方は全羅道に偏っている。現在全羅道出身の若い人に「甘薯」を「カムジャ」と言うか聞いても否定的な答えしか返ってこない。しかし少し年齢の高い人に聞くと若い頃にその言い方をしていた、今も時折使うと言うことであった。

全羅道の若い人達はソウルで使っている「コグマ」と言う言い方をしている。これが一般的になっている、と言うことであった。

「カムジャ」はソウルでは「じゃがいも」を指している。どうしてそういう意味が生じたのか、これはその語と共にその食物も流動したからであると考えられる。

具体的に食物がどういう流動したかを説明することが必要になった。